「奈半利地区における民活団体の防災意識を啓発するとともに安全で安心なまちづくりの展開に向けた調査」

報　告　書

高知県地区

財団法人　ハウジングアンドコミュニティ財団

非営利活動法人　高知ＮＰＯ

平成16年3月

目　　次

１）活動の背景

１－１　調査対象地の概要

１－２　被害想定

２）活動の経緯と目的

１．当団体（高知ＮＰＯ）と奈半利町の関わり

２．この活動が始まったきっかけ

３．活動の目的

４．活動地区の選択理由

３）活動の内容

４）活動の成果

５）今後の展開

６）活動のポイント

１）活動の背景

１－１　調査対象地の概要

１　自然的条件の特徴

・　位置及び面積

奈半利町は、高知市から約 60km の東部にあり、北緯 33 度 25 分、東経 134 度 1 分に位置する。奈半利川河口から羽根岬に至る海岸部は東西約 8.9km あり、黒潮おどる太平洋に面している。海岸部から野根山連山に至る山岳部は南北約 7.9km あり、ほとんどが雑木林となっている。その麓にひらけた平野には田園と住宅があり、奈半利町の中心となっている。北は北川村に隣接し、西は奈半利川を隔てて田野町と接し、東は室戸市に隣接している。

面積は 28.30 平方 km であり、そのうちの 77%は森林が占めている。

・　地形

本町の地形は、おおまかにいって、東北部の山地、台地、西部の低地に分かれる。

奈半利町中心部の航空写真

野根山山系の尾根筋が西向きにのび、土佐湾に向かって標高を下げてきて、海に臨んでいるという山地が本町の主軸となっている。

そして、山地の末端部は、古代の海の侵食作用によって造り出された海岸段丘が東北方向に並んでいる。

最高標高地点は、北東端の須川山山頂の 876m であり、そこから西側の三ツ日山は 452m と下がり、麓周辺の台地は 100m 前後となっているのが地形の特徴となっている。

低地は、標高 10m 未満の平坦地が大半であり、海岸沿いの集落には 10m の堤防が連なり、その海側にはふるさと海岸が整備され、防災上多大な役割を果している。

本町の水系は、山地の須川川水系と長谷川水系、ほかに分かれ、平野部の水系は奈半利川本流に支配される。過去においては、幾多の災害をもたらしてきた長谷川水系の下流域は、河川改修が進み洪水の心配がなくなってきているし、奈半利川は上流のダムや河岸の堤防によって管理されている。

・　地質

本町の基盤岩類は室戸半島層群に含まれ、砂岩勝ちの砂岩泥岩互層であり、今から約 4 千万年前に出来たものといわれている。その上層部にある円礫層や泥層は今から 1 千万年前後に堆積した地層で、唐ノ浜層といわれている

さらに上層部にある砂礫層は今から数十万年前に出来たものといわれ、段丘礫層といわれ、標高 170m から 70m の地帯にみられる。

奈半利川下流の平坦低地、国道 55 号線沿いの海岸低地、須川川などの河川沿い低地を被う土砂礫は、今から約 1 万年前あたりから現在に至るまでの間に堆積した沖積層である。

・　気候

本町は、北東に野根山系の山岳があり、南には暖流のおどる太平洋に面しているため、高温多湿であり、年間平均気温は 17.0℃、最高気温は 31.2℃、最低気温は 1.6℃となっている。

高知県の特異性で雨量は多く、年間降雨量は 2,152 ミリを記録している。また、8 月中旬から 9 月下旬にかけて、台風がたびたび通過する。

1 月上旬から 2 月下旬にかけては、たまに降雪を見ることがあるが、積雪はほとんどない。

２　災害の特徴

・　地震災害

南海トラフを震源とする地震は、100 年から 150 年の周期で繰り返し発生しており次に発生する時期や規模について、地震調査研究推進本部から発表されており、今後 30 年以内の発生率：４０％とされています。

それにともない、当町では震度６弱の地震が予測され、地震発生後 30 分以内に全ての海岸線に津波の到達が予測されている。

３　災害に対す危険性

地震災害に対する問題点と対応としては、市街地では、構造物の倒壊が予想されるため、安全な広場及び公園等への避難を行わなければならない。

津波に対しては、発生する可能性のある津波が既存の構造物ですべて防ぎぎれるとは言いきれないし、奈半利川を遡上してくることが予想される。海岸付近では地震時には津波情報に十分注意し、海水浴客、釣り人、漁船等についても早めに避難を行う必要がある。

4　社会的条件の特徴

・　人口

本町は大正 5 年 5 月 1 日に町制を布き、奈半利村から奈半利町となった。本町の人口は下表のとおり昭和 22 年の 7,347 人をピークに減少し始め、平成１２年には 4,０２７人となっており、なお減少の兆しがある。

国勢調査人口の推移

区　　分	総　数	男	女
大正 9	4,848	2,353	2,495
14	4,810	2,341	2,469
昭和 5	5,170	2,565	2,605
10	5,314	2,675	2,639
15	4,975	2,367	2,608
22	7,347	3,500	3,847
25	7,293	3,514	3,779
30	7,187	3,369	3,818
35	6,914	3,292	3,622
40	6,223	2,910	3,313
45	5,084	2,378	2,706
50	5,008	2,339	2,669
55	4,874	2,274	2,600
60	4,870	2,291	2,579
平成 2	4,527	2,113	2,414
7	4,２91	1,995	2,336
12	4,027	1,832	2,195

昭和 35 年の 1.742 世帯が 40 年後の平成 12 年には 1,593 世帯となっている。1 世帯あたりの人員は、3.97 人から 2.42 人と減少している。

世帯の推移

区　分	世　帯	1 世帯人員
昭和 35	1,742	3.97
40	1,716	3.63
45	1,618	3.14
50	1,652	3.03
55	1,639	2.97
60	1,698	2.87
平成 2	1,633	2.77
7	1,622	2.65
12	1,593	2.42

なお、65 歳以上の人口は、昭和 35 年の 495 人（比率 7.2%）が増加を続け、平成 12 年の 1,319 人（比率 32.8%）となっている。

集落別及び年齢別人口

（平成 12 年国勢調査）

集落名	0～14 才	15～29 才	30～49 才	50～64 才	65 才以上	総　　数
草　瀬	19	11	34	22	46	132
中　里	9	17	22	22	77	147
百　石	8	13	30	24	52	127
樋ノ口	60	31	75	53	63	282
上長田	14	13	28	38	54	147
下長田	26	21	45	49	64	205
東町	11	15	18	16	41	101
平松	35	31	60	49	64	239
横町	67	96	130	152	132	577
立町	19	24	40	53	75	211
弓場	9	10	17	16	16	68
東浜	51	59	145	152	179	586
生木	36	23	42	25	38	164
宮之岡	0	0	0	1	99	100
法恩寺	21	18	46	45	56	186
六本松	8	9	22	23	26	88
平	7	5	13	19	30	74
宇川	5	2	10	9	14	40
須川	13	3	14	15	24	69
久礼岩	0	2	4	9	10	25
大原	6	8	14	21	20	69
加領郷	28	42	51	74	100	295
池里	5	1	6	7	11	30
米ケ岡	0	4	1	6	9	20
港町	0	3	9	14	19	45
総　数	457	461	876	914	1,319	4,027

15 才から 64 才までの労働力人口は 2,251 人（比率 55.9%）であり、山間部の人口は 253 人（比率 6.2%）にすぎない。又、災害が発生した時には、高齢者や障害者などの弱者の救出が最優先されるので、消防団員や民生委員は地域ごとの名前入りの住居地図を持って、日頃から声をかけるなどして確認しておく必要がある。

・　建物

平成 14 年 1 月 1 日現在における本町の家屋は、総数で、3,317 棟あり、その構造による内訳は、木造家屋が 2,886 棟となっていて全体の 87.0%を占めている。

建物の構造・用途別内訳

木　　造	家屋敷	非　木　造	家屋敷
専　用　住　宅	1,387	住宅・アパート	127
併　用　住　宅	195		
農　家　住　宅	296		
漁　家　住　宅	23		
事務所・店舗	54	事務所・店舗	54
病院・旅館等	16	病院・ホテル等	9
工　場・倉　庫	74	工場・倉庫	155
そ　の　他	841	そ　の　他	86
計	2,886	計	431

・　道路

道路は日常生活に最も密着した基盤施設であり、交通機能はもとより、防災や環境保全の空間地として、多様な機能を持っている。

本町における道路は、国道 55 号線（東西 6.428km）と国道 493 号線（南北 1.958km）のほか町道は 73,815m（平成 14 年度末）の延長があり、その舗装率は 86.0%となっている。農道は 12,928m（平成 14 年度末）の延長となっている。

本町での最も交通量の多い道路は国道 55 号線であり、平成 14 年 8 月における 1 日あたりの通行量は 12,632 台となっている。

本町生命線の国道 55 号線が災害により不通の場合は、海上保安庁の船舶及び民間船舶等の運用にて、海路による物資等輸送を確保する。特に奈半利港が高知港の補完港であり、180m の耐震バースが整備され地震時においても 300 トンの船舶の入港が可能な為、高知県東部の海路の拠点となる。又、奈半利港の背後地となる、整備された奈半利緑地公園が、県消防・防災ヘリコプターの離着陸場に指定されており、被災地への空路にての物資等の輸送が、可能である。

5　歴史的条件の特徴

地震によるものは、白鳳 13 年（684）、慶長 9 年（1605）、宝永 4 年（1707）、嘉永 7 年（1854）の大地震が当町ではあるが、最近では、昭和 21 年（1946）12 月 21 日早朝（4 時 19 分）南海大地震が起こり、高知県では未曾有の大災害となっている。震源地は紀伊半島潮岬の沖合約 50Km の地点、震動は強震で、その被害は中部地方から九州までおよび、その中でも高知県が最も大きい被害を受けている。奈半利町では、被害は死者 4 人、負傷者 29 人、家屋倒壊 63 戸、半壊 42 戸、道路堤防の決壊 7 ケ所におよんだ。

夜が明けてみると家屋はほとんど西方に傾き、八幡宮の鳥居は倒れ、奈半利川河口海岸付近の砂地では、陥没した箇所（陥没孔は大きいもので径 1m）から泥水が噴き出していた。県下的には津波被害も多かったが、当町では、津波と火災による被害が無く、不幸中の幸いであった。

１－２　被害想定

１　地　　震

本町は、昭和 21 年（1946 年）12 月 21 日早朝（午前 4 時 19 分）に起きた南海大地震により死亡者 4 人、負傷者 29 人、家塵の倒壊 63 戸、半壊 42 戸という被害を受けている。（「奈半利町史」から）

高知県は、地震対策基礎調査により、地震想定により安政南海大地震と同タイプのものを想定しているので、本町も地震による被害想定を次のように仮定した。

① 震源地　　土佐沖 250km（安政南海地震時）
② 規　　模　　マグニチュード８．４クラス（１８５４年の安政南海地震程度）
③ 発震時刻　　冬の早朝（午前 6 時前後）
④ 気象条件　　降雨や降雪はなく、風速は秒速 9m とする

平成 7 年 1 月 17 日早朝に兵庫県南部を襲った大地震は活断層による「直下型地震」であったが、高知県には活断層がほとんどないので、被害想定は、直下型と違う激しい横揺れが続く巨大地震を予想している。

２　津　　波

１８５４年の安政南海地震と同じ震源地を想定するならば、15 分～20 分で津波の第 1 波が来襲するものと予想される。

① 津波の高さ　6m（安政南海地震時）
② 危険区域　　奈半利中学校南付近

海岸の防潮提は高さが 10.3～11.3m あるが、奈半利川の堤防は低いことから奈半利中学校南付近の冠潮が予想される。

２）活動の経緯と目的

1．当団体（高知ＮＰＯ）と奈半利町の関わり

◇サンゴ礁発見と共に始まった、高知ＮＰＯのまちづくり支援活動（人と自然の共生）

平成14年４月、なはり沖に高潮対策として設置された、**消波ブロックにサンゴが群生**しているという記事が、高知新聞に掲載された。

ごめん･なはり線の開通を控え、高知県の中でも、まちおこしの必要性が高まっている東部地域を、何とか元気にしたいと考えていた高知ＮＰＯは、奈半利町漁協、商工会、自然保護研究会、浦の会、教育委員会などと一体になって、天然資源活用委員会を立上げ、サンゴ礁を活かした「まちづくり」を模索しはじめた。

◇これまでの活動の概要

[H14. 6.14]　天然資源活用委員会発足
・奈半利川文明再生構想（人と自然の共生）を作成

[H14. 8. 3]　青いサンゴ礁認知計画
・グラスボート船によるサンゴウオッチング開催
・200 名以上の乗船客を集め、アンケートにより継続運航のニーズを確認
・乗船客名簿より、なはり線（鉄道）への波及効果を試算

[H14. 10.19]　「ちいきのみんなで考えよう」シンポジュウム開催
・広域連携への呼び掛け

[H14. 10.25]　グラスボート船の継続運航（事業化）開始
・平成 15 年９月現在で、延べ乗船人員 1,500 名

[H15.　8.21]　高知海辺の自然学校開催（国土交通省・奈半利町主催）
・グラスボート船以外でサンゴを楽しむ方法を調査

[H15.　9.　3]　発想の転換「せかいのかみやまに学ぶ」セミナー開催
・テーマは民と行政の協働

2．この活動が始まったきっかけ

Ｈ14年12月中央防災会議より、東･南海地震の想定が出され、Ｈ15年4月の被害見直しにより本県（高知県）の死者が、最大 6,200 人と発表された。

奈半利海岸を活動拠点とし、「人と自然の共生」をキーワードに活動を続けていた高知ＮＰＯ（天然資源活用委員会）は、ここで根本的な問題に直面した。

東南海地震が予測通りのエネルギーで襲ってきた場合、奈半利町の住民は生き残る事が出来るのだろうか。

残念ながら住民の多くは、まちづくり活動の根幹に関わる ” 助け合う･支え合う ” 部分の、防災的意識に目覚めていないのが現状である。

奈半利町を、≪人と自然が共生し続ける町≫ にしたい。この思いが今年度の活動のきっかけとなった。

3．活動の目的（何のために何をやるのか）

防災問題は、被災地域に住む人々全員に関わる問題でありながら、もしもの時、どのように行動するのかを確実に答えられる人は非常に少ないのが現状である。

また、地域住民にとって防災対策は行政主導でやるものであり、いざという時は行政が対応してくれるものと思い込んでいる部分があり、住民の危機意識は現実味を帯びていない感がある。

したがって、行政が作成した地域防災計画書はあるが、そこに①何が書かれているか、②どのようにすればよいか、については、行政担当者ですら一住民として答えられる人は少ないのではないだろうか。

南海地震等で被災した場合、「どこに、どのように、いつまでに」避難すればよいのか、「いつまで」避難していればよいのかについて、住民は自らが知っていなければならないし、備えをしたいと思っている人も多いと思われる。

しかしながら、住民が個人個人で出来る訓練は限られているし、地域ぐるみでの訓練はしたくても機会を得られないでいるのが、現状ではないだろうか。

自主防災活動初期においては、「こうやってみよう。ああやってみよう」という声かけ役、すなわちＮＰＯ団体等による、行政では出来ない部分のサポートが必要だと考えられる。

今回の活動は、高知ＮＰＯ会員の在住地域で、地元住民と一緒になって防災意識を啓発し、将来的には、“住まい空間におけるルールづくり”を通した、自主防災組織設立を、支援することを目的としている。

4．活動地区の選択理由

（1）．　広域性

中芸地域は、奈半利川を通じて、上･下流に長く集落が分布しており、昭和初期には、馬路村から奈半利海岸まで森林鉄道で木材を運び、船便で近畿地区に供給していた歴史がある。また、現在も魚梁瀬ダムによって、中芸地区に電気が供給されており、防災に取り組む上で、町村の枠組みを超え、一体感を得やすい関係にある。

（2）．　地理的条件

防災を通じて上･下流の住民が連携するためには、①広域震災後、物資が港から供給できる事。②被災度合いが少ない場所に、疎開できる環境にある事。③普段から連携訓練が可能な事。が重要である。

中芸地区は、この3つの条件を満たし、東部の防災拠点となりうる。

（3）．　社会的条件

先進的な取り組みとして、自主防災訓練を広域で連携するためには、住民と行政の中に、災害に関する危機感を強く持って行動する人の存在（自助）が不可欠である。

また、広域で一度に被災した場合、自助に加えて互助（被災地域の助け合い）公助（行政を主体とした援助）が重要になってくる。

(4). 地区選択理由

なはり地区は、前述のように広域的な結びつきが歴史上強い。また、耐震岩壁を備えた港(奈半利港)を有している事で、防災においては、高知港の補完港として位置づけされており、高知県東部の海路の拠点となる。

さらに、社会的条件においては、地域振興活動において、民活で「この地域を何とかしよう」という意気込みの人及び団体が存在し、地域で連携して突破口を見出そうとがんばっている。

これは、防災において重要な、「自助・互助」の潜在的能力を証明するものであり、自主防災に必要な、前提条件を満たしている地区だと言える。

このような理由から今回は高知ＮＰＯ(天然資源活用委員会)の東部の活動拠点であり、高知ＮＰＯ会員在住の地域でもある奈半利町を活動地区に選択した。

３）活動の内容

今年度高知ＮＰＯは、奈半利地区における民活団体の防災意識を、啓発するとともに安全で安心な町づくりの、展開に向けて以下のＳＴＥＰで活動を行った。

ＳＴＥＰ１　地域の現状を認識するための資料を作成（平成 15 年 11 月～平成 16 年 1 月）

狙い１：東南海地震では広域災害が予想されており、遠方からの援助が遅れる事が懸念されている。奈半利町を含む中芸５ヶ町村では、救援、災害時の疎開、奈半利港に上げた救援物資の運搬などで、お互いに助け合う事が必要になる。
奈半利町及び周辺町村の歴史や観光資源、又は新たな活動を再認識する事で、市町村間の連携意識を醸成するため、以下の資料を作成した。

① 中芸　５ヶ町村の観光資源を、認識するためのスライドショー
② 歴史を再認識するために、森林鉄道のスライドショー
③ サンゴ礁を活かしたまちづくりプロセスを、説明するためのスライドショー

狙い２：自分たちの住んでいる奈半利町が、津波によって受ける浸水被害をリアルに認識し、今後の活動に活かしていくため、津波による浸水予想図の調達及び、航空写真の重ね合わせ図を作成する。

ＳＴＥＰ２　現状の把握……南海地震に関する講演会

日　時：平成 16 年　1月 18 日（日）　13：30～16：00
場　所：奈半利町保健福祉センター（グリーンホール）
参加者：150名
講　師：高知工科大学　中田慎介教授
内　容：南海地震の被害予想
・中芸の観光資源、森林鉄道、サンゴ礁を活かしたまちづくり、のスライドショーを、講演開催前 20 分間と休憩時間に上映。

スライドショーに見入る参加者

《参加者の声》

・参加の年配者からは、「いや、懐かしいねえ。私が子供の頃乗った森林鉄道や」とか、「この場所しっちゅう(知ってる)。しばらく行ってないねえ」などの声が上がった。

・比較的若い参加者からは、「奈半利の海岸に、こんなサンゴ礁があるの」などの声が上がり、自分たちの住む地域でも、認知されていない資源がある事が分かった。

《講演内容》

・阪神大震災の被害状況(家屋の倒壊状況)等を、スライドを使用して詳しく説明

・高知市の例に基づいた、浸水箇所や避難経路の説明

・ビデオを使用した、淡路島北淡町の災害救助事例の説明等

聴講者は熱心に聞き入り、活発に質問が出された

STEP3　問題点と対策の協議……上長田地区で図上訓練

日　時:平成16年 2月 6日(金) 18:30～21:00

場　所:奈半利町 上長田地区集会所

参加者:22名

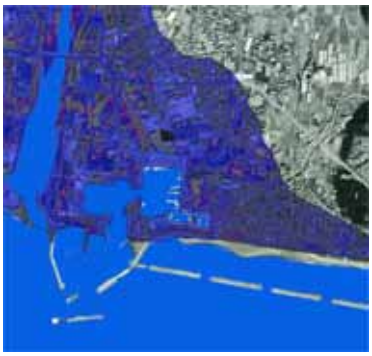
テーマ:上長田を地震からどう守る

【実施事項】

・安芸市のまちづくり課より借用のビデオを見て、東南海地震の津波被害を映像として認識した。

防災ビデオに見入る奈半利町上長田地区住民

・県発表の浸水予想図と航空写真を電子的に重ね合せた図を提示。



奈半利町の浸水予想図（高知県の想定に基づく）

・南海地震による、上長田地区 150 名の避難場所（藤村製紙）への避難誘導と題して、参加者を3班に分け、図上訓練（問題点と対策の具体的協議）。

協議結果を各班毎に発表

【参加者意見】

・「こんな津波が来たら、私らあひとたまりもないねえ」72 歳女性

・「私は地震が恐いから、この前来た企業に補強を頼んだら 80 万かかった。年がいってお金の要る事ばっかりでつらい」75 歳女性

上長田地区住民による図上訓練の状況

【 協議内容 …… 避難誘導の問題点及び疑問点 】

（ア） 津波は奈半利川を逆流してくるのでは

（イ） 地震の最中は家の中にいていいのか

（ウ） 地震後、何分くらいで津波が来るのか→15～20 分

（エ） 津波が来た時の水位は→7mくらい

（オ） 水槽は大丈夫か（神戸の時の様にバケツが必要ではないか）
（カ） 奈半利川、田野町側の整備が遅れている
（キ） 一人暮らしの人は→皆で確認
（ク） 防災グッズの内容は
（ケ） 藤村製糸までの逃げ道は（細道をさける）
（コ） 火災と浸水どっちが先か→水
（サ） 別集落の人が住んでいる事がある
（シ） 津波が遡上する可能性あり
（ス） 避難場所への経路上に水路がある
（セ） 耐震補強をしたけど大丈夫か
（ソ） 障子が曲がって外にでられない
（タ） 電気の元を落すのに手が届かない
（チ） 火が出たら止まる所がない
（ツ） 隣の家でも別の集落になっていて知らない人がいる
（テ） 近所づきあいのない家がある
（ト） 高齢で足が悪く、逃げ遅れる人がいる
（ナ） ブロック塀が倒れて通れなくなる
（ニ） 家が倒れると通れない
（ヌ） 家が地震で崩れないか
（ネ） 道路幅のせまい所が地震時に通れるか
（ノ） 避難放送が聞こえないのでは
（ハ） 地震後の火が心配
（ヒ） 扉（門）が開くかどうか　鍵（通用門）
（フ） 班の家が分散している

（ス）避難経路上の水路

（ナ）ブロック壁に挟まれた
避難経路

（フ）４班の家は点在している

【 上長田地区における防災上の強み 】
(ア) 大工さんがいる
(イ) 工具がある
(ウ) 人がいる
(エ) 医者と食料品がある
(オ) 衣料品と飲み物がある

上長田地区の医者と食料品店

ＳＴＥＰ４　対策の分類と今後の方向性の検討……第三回協議

日　時：平成 16 年 2 月 15 日（日）16:00～17:00
場　所：Ｔ社 2階会議室（天然資源活用委員会事務局）
参加者：15 名
内　容：① 図上訓練で、協議した対策をもとに、ソフト面、ハード面に分類
② ソフト、ハードに分類した対策を、住民自身で出来る事、行政及び企業の協力が必要な事に振り分け
③ 振り分けた対策を、大まかな行動計画に落とし込み

対策の分類と行動計画の協議

【ソフト面の対策（自分達で出来る事）】
（ア）消火栓の使い方を皆で実習しておく（ホースの使い方）
（イ）隣近所の人の寝ている部屋を確認する事が必要（プライバシーの問題を検討）
（ウ）家族名簿を部落長に提出（班全員で共有する　顔写真付き）
（エ）一人暮らしの人を皆で確認
（オ）逃げるときの準備（荷物）が必要
（カ）班の中でも近くの家で連絡方法を決めておく
（キ）班の中で3つのグループに分けて互助する
（ク）揺れている間は火を消しに行かない
（ケ）逃げるときに近くに声を掛ける（戻れない）
（コ）どこに寝ているのか話し合い
（サ）隣近所の協力が大事
（シ）寝たきりの人の救助方法は　タンカー、毛布、リヤカーなど（藤村製糸まで）
（ス）材料（竹等）を藤村製糸に常備しておく
（セ）日頃から救助方法を勉強しておく
（ソ）自分で逃げられない人への声掛け等できるしくみが必要
（タ）藤村製糸を避難場所として、それもダメならどうする（別ルートを考える）

【ソフト面の対策 （自分たちと行政が協力する事）】

（ア） 時間帯を考えた訓練が必要

（イ） 防災グッズの中味を考える（枕もとに靴とか）

（ウ） 若い人の力を借りる（協力）

（エ） 子供と一緒の訓練を実施

（オ） 消火器が家庭に必要ではないか

（カ） 班別の住所リストの作成

【ハード面の対策 （行政と企業が協力）】

（ア） 建物の造りの確認が必要（木造・鉄筋）

（イ） Ｓ５６年以前の家は耐震診断を受ける

（ウ） 耐震診断をしてもらう

４）活動の成果

自主防災組織が出来なくて、防災への取組み機会も得られていなかった奈半利町民にとって、今回の活動は、全く初めての出来事であり、気迷い気分のまま推移した感があるかもしれない。

しかしながら、今回の活動は、まちづくりの展開、特に防災を含む地域コミュニティーの再生において、大きな成果があったと考えている。以下に、その成果を列記する。

≪防災講座における成果≫

- 当初、上長田地区のみで実施する予定であったが、奈半利町役場が関与する事により、広く参加者を募る事が出来、町内における被害予想の認知度が上がった。
- 講演会を通じて、住民の中に防災意識の高い人がいる事を確認でき、今までは“機会”が与えられていなかったのだと分かった。今回の講演会は、災害の現状認識をする“機会”を提供するという意味では、大きな貢献度があったと思われる。
- 会場及び参加者の地域を限定する事により、環境や問題点を共有する事ができ、自主防災に必要な、地域の一体感を感じる事が出来た。

≪図上訓練及び協議会における成果≫

- 上長田地区は、**居住者の移動が殆どなく**、昔から充分なコミュニケーションのとれている地区であり、災害時には、淡路島北淡町のような対応のできる潜在能力を秘めている事が分かった。自主防災組織立上げのモデルとして、地区選択が良かったと感じた。
- 図上訓練では、参加者は真剣に話し合い、発表をした中で、**一人一人では気づかなかった問題点**が明らかになった。
- 訓練の参加者は、22 名であったが、得意の地域コミュニケーションによって、上長田地区住民約 150 名に情報が広がっている事が期待される。
- 話し合いの中で、防災に関する**地域の強み**が発見でき、今後のまちづくりを考える上で、ヒントになるものと思われる。
- 上長田地区の参加者は、地区長を初めとして、自主防災組織の設立を前向きに考えていた。早急に、**顔写真入りの名簿作成**に着手するとの事であった。

5）今後の展開

≪上長田地区住民の活動予定≫

① 各家の住民写真を撮影（平成16年度上半期）

↓

② 写真をもとに顔入り住宅地図を作成（平成16年下半期）

↓

③ 実際に指定されている避難場所に逃げてみる（平成17年度）

↓

④ 顔入り地図により人員の確認（平成17年度）

↓

⑤ チェックポイントによって訓練を評価（平成17年度）

↓

⑥ 不具合箇所の改善

［ 避難訓練のチェックポイント ］

（ア） 一番遅かった人はどれくらい時間がかかったか

（イ） 避難場所は安全か、等

（ウ） 避難場所はそこで良いか

（エ） 逃げ遅れる人はいないか

（オ） 津波の速度よりも早く避難出来たか

（カ） いつでも（夜中）でも同じ行動がとれるか

（キ） 自分の命は守れるか、家族の命は守れるか

（ク） 自分がパニックになっているのに、人に声をかけることが出来るのか

≪行政：奈半利町役場の支援予定≫

奈半利町民の住宅50件分の耐震診断予算措置

自主防災組織立上げ支援金の、予算措置2集落分（平成16年4月には上長田地区で自主防災組織に登録予定）

６）活動のポイント

（１）　活動の人材

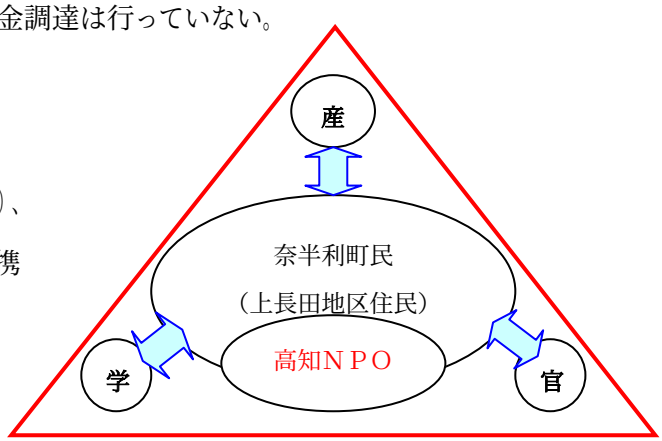
- **今回の活動のリーダー（高知ＮＰＯ会員）が、奈半利町上長田地区在住**という事と、リーダー個人の優れた対人能力により、調査全般がスムーズに進んだ。
- 活動の人材は、上長田地区在住者を中心に集めたが、講演会においては、奈半利町の関与により、奈半利町全域に参加者を呼掛けた。
- 講演会 150 名、図上訓練 22 名、協議会 15 名の参加者は、終始真剣に取組み**参画者**となった、「自分たちの事は、自分たちでやろう」という声が良く聞かれ、まさに住民自らが考えた調査となりえた。
- 県住宅企画課の方が、**個人的に参加しコーディネート**してくれたため、より活気のある図上訓練となった。
- **奈半利町役場も、自主防災組織の設立支援が課題**であったため、講演会開催にむけて、前向きに協力してくれた。
- 高知工科大学の中田教授の講演は、熱い語り口で、聞く人を引き付けた。また、工科大の学生で、**奈半利町出身者を同行**してくれるなど、今回の調査活動を大きくバックアップしてくれた。

（２）　活動のための資金調達

今回の活動においては、本調査の業務委託以外、資金調達は行っていない。

（３）　活動のためのネットワーク支援

民：高知ＮＰＯのネットワークで、**産**：企業（建設）、**学**：高知工科大、**官**：高知県、奈半利町と幅広く連携する事が出来た。



（４）　その他

特になし